

インドを源とする仏教の流伝、特に密教の東遷の形態を考察するうえで、陸上交易路(陸のシルクロード)のみならず、海洋交易路(海のシルクロード)を通じた流伝ルート上の諸地域との文化交渉を考慮する必要がある。9世紀初頭に空海により我が国に流伝した密教も当然のことながら様々な国に根付いた文化との交渉の歴史がある。

海洋交易路の要所であったインドネシア諸島では、4世紀にインドからヒンドゥー文化が流入する一方で、スマトラ島、マレー半島を中心とするシュリーヴィジャヤ朝とジャワ島中部地域を中心とするシャイレンドラ朝が勢力を強めた8世紀には、インドネシア諸島には密教が流布しており、ジャワ島中部や東部では、密教文献の規定に基づいて制作された建造物や仏像の存在が明らかになっている。中でも台座に金剛界四部族の三昧耶形を施した四面毘盧遮那を中尊として、四仏、十六大菩薩、内外八供養、四摂、賢劫十六尊の四十九尊で構成される青銅製の金剛界曼荼羅や、『サマーヨーガタントラ』に説かれる金剛薩埵族二十一尊曼荼羅を構成する諸尊などインドではすでに失われた密教の遺品が数多く現存している。

その反面、現存する遺跡、出土した遺品の量に比して、現地に残される密教文献資料は限られると言わざるを得ない。10世紀頃の編纂とされる『聖大乘論』や『聖真言道大乘』には、『大日経』や『タトヴァサングラハ』、『理趣広経』を出典とする灌頂儀礼の記述が認められ、『カルパブダ』や『ナーガバーユストラ』などの金剛界五仏に関する記述を示す密教儀軌が現存することは明らかにされている。しかしながら、ネパールなどのインド周辺地域で散見されるような密教經典の完本は未だ発見されていない。

また、インドにおいて密教が最後期に至るまで栄えた地域であるオディシヤ州や隣接するチャッティスガル州、西ベンガル州、バングラデシュ西部からは、インドネシアの密教遺品とも高い類似性をもつ遺品が発見されている。これらの地域は、海洋交易路を通じてインドネシア諸島と密接に関係しており、8世紀頃から14世紀にかけてのインド文化圏における密教の流伝形態の解明には、これらの地域の出土品を考察対象に加え総合的に分析、判断する必要がある。加えて、オランダやアメリカの博物館には、インドネシア諸島から流出した多数の密教遺品が分散して所蔵されており、これら諸資料を包括した全体的な考察の必要性が認められる。

今回の発表では、海洋交易路上から出土した密教遺品、遺跡の考察を通じて、それらの遺品・遺跡と日本密教との関係性を視野に入れ、海洋交易路を通じた密教文化の交流に関して考察を進めたい。

〈キーワード〉 海洋交易路、インドネシア、金剛界